

# 末松謙澄の師 村上佛の巡行人

ぬきなかいおく いけうちらうしよ  
貫名海屋と池内陶所

江戸時代後期に貫名海屋（一七七八〜一八六三）という学者がいた。海

路線の違いからなのか、残念な事に尊攘過激派の士から暗殺された。

屋は、四国・阿波（今の徳島県）の出身で、大坂の中井竹山なかいちくざんに漢学を学び、京都の矢上快雨やがみかいうに詩文を習い、尊皇攘夷の吹き荒れる幕末の京都で私塾「須静堂」を開き、朱子学・陽明学・古学をあわせた折衷学を志の高い若き志士たちに教えた。

村上仏山は、文政十三年（一八三〇）

八月から四ヵ月ほど須静堂に滞在し、海屋から親しく指導を受けた。元来、勤皇の志が厚く幕府に捕縛されるおそれから海屋は一時、仏山の家に亡命していた。その時に揮毫した扁額が仏山堂文庫と仏山の生家に残されている。仏山にとっては、心より尊敬する秋月の原古処・白圭父子を亡くしてから、久々の素晴らしい師との出会いだだった。後に、海屋は『仏山堂詩鈔初編』に評文を寄せている。仏山は、この須静堂で池内陶所と出会って意気投合した。

陶所は仏山にとっては大恩人で、詩集の刊行時に親身になって世話をしてくれた。これは、仏山の義弟である安広仙杖やすひろせんじょうが、偶然にも嘉永三年（一八五〇）六月に京都で陶所の塾に入門した事がきっかけとなった。仏山は、「これは、奇縁だ」と陶所に詩集出版への協力を求める便りを送った。返事は「及ばずながら、ご協力したい」とあり、旧師・海屋を初め京坂詩壇の名家のほとんどが、陶所の依頼に応えて序文・評文を寄稿してくれ、自らも評文を寄せた。

そして、陶所は安政四年（一八五七）五月に水哉園を訪れた。実に、二十八年ぶりの再会であった。「朋あり遠方より来る亦また楽しからずや」と、仏山は体調が優れない中を大感激して歓待し、つもる話を一晚中交わした。このように、仏山は恩師や朋友に恵まれた人生を送った。

池内陶所（一八一四〜一八六三）

（末松謙澄顕彰会 堀史雄）

は、京都の商家の出身で、やはり尊皇攘夷の志士だった。五十歳の時に